

Romancer

私自身のための出版



相模原・上溝の作業小屋 平成18年
加藤忠一著『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』より

出版を考え直す

何のためにデジタルで出版などするのでしょうか？ はじめは誰もが否定的な意見を述べました。相手にしない人さえ多かったとおもいます。10年、20年、時間が経つにしたがってデジタルは着実な進歩と浸透をはたしました。いまや誰の日常生活のうえにもデジタルは舞いおりているとっていい状況です。

出版はどうでしょうか。“電子書籍”はたしかに普及しているように見えます。けれど溢れんばかりに刷り尽くした紙の本を“電子書籍”にしているだけのように見えます。ある人はprint under glass(印刷本をわざわざガラス越しに見ている)と揶揄やゆしたくらいです。出版が本当にデジタルの恩恵を得ているのかどうか、まだ簡単には答えはだせません。

この20年、出版産業はその市場規模を減少させました。確実に売れるであろう内容に焦点をしぼる姿勢を強化していきました。何が売れるのか、あらゆる手段をつかって答えを導きだし、分析し、過去の実績をより深くみるようになりました。これによって救われた面があったのは事実でしょう。けれど、失われた面のあったことも忘れてはなりません。売れそうもないとおもわれた作品は徹底的に排除されていったのです。内容的な硬さ、無名な作家、テーマの個人的なこだわりというものが挙げられるでしょう。これらの事柄は、多様性という実は出版の一番大切な部分であったはずのものです。

そもそも、出版とはどういうメディアであったのか、出版に対する考えの違いが大きな問題提起となってきました。メディアが集金システムを伴って成り立っていることはみんなわかっています。メディアはけれど情報＝事実・知識・意見てんばを伝播する手段であるわけです。大きな目的を集金システムがおおい隠し、奪い、弱めていったとおもいます。

デジタルの出版はこの状況の中に産声うぶごえをあげたのです。だからこそ、出版のメディアとしての役割についてこだわるのです。自立した道を進もうとしたのです。デジタルにはそれを可能にする力があります。

この力を引き出すのは誰でしょうか………… 私たち自身です。

▶ 素晴らしい作品であるかどうか

読者のために、作家のために、役に立つ電子出版をめざしながら、幾度となく挫折を繰り返しました。原因は多々ありました。ある特定の機種や一部のOSに依存しすぎたために出版という普遍性から離れてしまったことは最大の失敗でした。出版はハードを売るための道具ではないのです。いくつかの教訓が生まれました。

- できるだけシンプルに虚飾を排すこと。
- 機種に依存することなくどんな環境でも閲覧できること。
- 世界の共通性に基づきいつまでも残る出版データであること。

こうした反省をもとに、やっと“ロマンサー (Romancer)”という出版ツールにたどりつきました。そしてそこでつくられる作品を見つめてきました。未来の作家との連帯こそメディアとしての自立だと信じてきたからです。

何に作家は重きを置こうとしているのか。何を訴えようとしているのか。表現が見事にできあがっている作品も、もがいている作品も多々ありました。

出版を成り立たせる根本は、作品であり作品を生み出す作家です。デジタルであるかないかは関係ありません。素晴らしい作品であるかどうかという勝負があるだけです。

驚くことに、最近になって作品の完成度、作家の迫力がみなぎってきたのです。内容の重みが群を抜いて向上してきました。それは作品自身に潜むパワーであり、読者の心を揺る^{ゆす}作家の息づかいであり、体験というその人の偏^{へん}狭^{きょう}な世界が、決して限られたものではなく共感というひろがりに通じるものである証拠を示していました。

あらためて、私たちは伝えるべきかずかずの物語を一身に背負っている存在なのだということをおもい知らされます。だから市井^{しせい}の作家に声援を送り、失敗を恐れず何度でもトライできる“広場”を確立することは、出版活動そのものであり社会にとって欠くことのできない仕事なのです。知らなかった事実も、知識も、意見も、そこから汲み取っていけるチャンスをつかむことができます。私たちに訪れる本当の時間がやってきたのです。

▶ 新しい創造はきっと生まれる

“ロマンサー(Romancer)”でつくられた『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』という画集があります。なにげない民家や商家を描いた25枚の絵から構成されています。ページを開くと、あゝどこかで見た風景だなとおもうようなトタン屋根の家があらわれます。

しばらくそれを見つめながら、添えられた一文が目に入ります。この言葉だけでも民家の絵と調和して心打つものを感じます。けれど、付け加えられた最後の一行がありました。その後取り壊された……と。

この作家は、加藤忠一さんという鉄板に表面処理する技術者だった人です。化学の専門家で鉄鋼の会社に入り、鉄に施す化学的な防蝕^{ぼうしょく}メッキを生業としていました。そこに思い出の風景があり、過ぎ去った時間があり、トタンがあり、錆びない、朽ちない技術をもってしても潰^{つぶ}え去ってしまうものの哀れを彼は絵の中に込めたのです。「その後取り壊された」の一言に、老いたるものの無力にして発したなにかを感じます。

すこし調べていくと、おなじ作家にこのほかにいくつもの作品がありました。そのなかに『ブリキとトタンとブリキ屋さん』という一冊があります。内容をみると、ブリキとトタンの出現から発展、生活に生かされていく歴史、関わった職人たち、製造技術の進化と変化、競合と共生、ここまで言及された大論文であることがわかります。

『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』を初めて目にしたとき生じたハッとするなんともいえない哀愁、この背景には作家のブリキとトタンに対するなみなみならぬ関わりと想いがあったわけです。

加藤忠一さんの書かれた作品は、おそらく今の出版界が受け入れることのないテーマであったのではないかとおもいます。「売れない」を理由に作品はきつと拒否されたであまりしょう。しかし、加藤さんはデジタル出版という手段を利用して、一人で見事に作品を公表したのです。

新しい創造はきつと生まれます。華々しい拍手や喝采とは無縁に、とぼとぼと道を行く湊^{はな}を垂^たらした少年のように素朴で頼りなげな姿であるかもしれません。その姿にデジタルの出版は限りない声援をおくりたいとおもいます。

私たちが作家と出会うとは、こういうことだったのです。

画面サイズと電子本

加藤忠一さんとの出会いをとおして、これからのお話を進めていきたいとおもいます。



本小冊子の表紙になった風景は『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』からのものです。加藤忠一さんとの出会いは、ここでのお話の契機となりました。ほかにも多くのアクリル淡彩の画集を出されているだけでなく、加藤忠一さんは専門的な著作も書かれており、そのなかには『高度経済成長を支えた昭和30年代の工業高校卒業生』という大部な作品もあります。

 作品URL:http://r.binb.jp/epm/e1_6733_24022015070220

『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』の作家は、描いた絵にちょっとした文章を付記して、自分のおもうレイアウトに表現したいと考えました。いくつかのソフトを使いこれをEPUBという一般的な電子出版共通フォーマットにしようと試みます……………しかし、おもうように行きませんでした。

結果、レイアウトを優先した固定版面のPDFがえらばれていったのです。こう考えるのは自然な流れだったとおもいます。そしてこの方法であれば自分自身でアマゾンでもどこでも販売を開始することができたのです。

ある日、作品はRomancerにも公開されることになりました。多くの注目を集めました。一方で、作品をどんな電子端末で読者は読むのだろうか、という考えが頭に浮かびました。画集なのにあえて「読む」と言ったのは、アクリル淡彩の絵に付いた文章の哀愁がたまらなかったからです。短いけ

れど文章の一字一句が非常に大切でした。

絵と文章を一致させて一画面に表示する……紙の本ではあたりまえのことですが、デジタルの本ではうまくいきません。紙の本とは違い読者の見ている画面が一定ではないのです。そのことを忘れずにいてほしいわけです。とくにモバイル環境での読書では文字が小さくなるという問題が出てきます。せっかくの作品だからできるだけ多くの人に読んで欲しい。大きな画面のデバイスだけでなく、スマートフォンでも読みやすい本にしたい、そのためにどうしたらいいのか？

▶ 固定レイアウト型とリフロー型

タブレットでは読めるけれど、スマートフォンでは読みにくい……これは一言でいえば、文字が小さいことにつきます。絵本なら、大きめに文字を書くという方法もあるでしょう。コミックの場合は指で拡大して読むこともできます……それだけでしょうか？

デジタルの本は、「固定レイアウト型」と「リフロー型」に分けられます。固定レイアウト型とは、大きな画面でも小さな画面でもレイアウトは同じです。レイアウトは変わらず、画面サイズに合わせて、たて・よこ比率は一定に縮小・拡大します。PDFはこの典型です。

リフロー型とはその逆に、画面のサイズに応じて自動的にレイアウトを変化させ表示するものです。画面が小さくなれば、表示される文字の量はページからはみ出し、次ページへ流れていきます。これがリフローです。

そうはいても、あまり複雑なレイアウトには適応できません。雑誌など見栄えを重んじる複雑なレイアウトをどうするか、現在こうした“複雑系リフロー”へのチャレンジが盛んにおこなわれている最中です。

リフロー型で自動的に再レイアウトされることを前提に、『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』を作り直してみたいとおもいます。

リフロー型の本をつくるために、MS Wordのファイル(docx形式)で原稿を用意することから始めてみます。Romancerは、このWordファイルを円滑に、一定品質を保って、電子出版の標準フォーマットEPUBへと導きます。

絵と文章の構成を考える

『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』はどのような内容構成になっているでしょう。

- はじめに
- 目次
- 本文
- 関連資料
- 奥付

という構成となっています。その内容をもう少し詳しく見ていきます。

1. はじめに

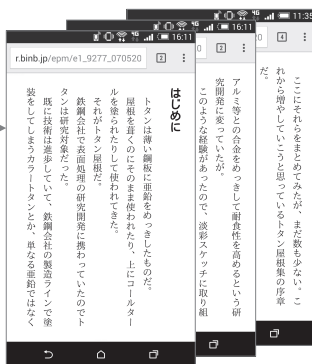
トタン屋根とはどんなものか、なぜトタン屋根に興味をひかれたのか、作者のメッセージがまえがきとして書かれています。

通常のテキストの文章ですから、じっくり読めるようにしたいですし、画面サイズに応じて文字の大きさが変更できるようにしたいところです。PDFにしてレイアウトを固定すれば、画面サイズの小さなスマートフォンではよく読めないものになってしまいます。《参照》図-1-1》



PDF での表示

(図-1-1)



リフロー型で複数ページに分割表示

(図-1-2)

2. 目次

次のページは目次です。描かれた25枚の絵、それぞれが目次となって瞬時にアクセスできるようにします。

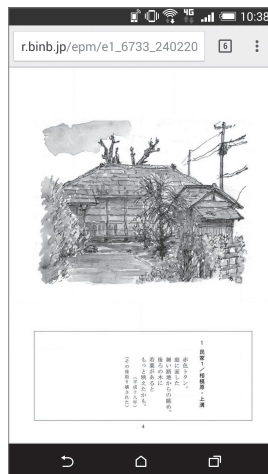
通常の紙の本のように目次の項目と、それが何ページにあるかという情報になっています。電子の本ですから、目次から該当ページにはジャンプさせたいところです。

3. 本文

次に、本文ページがはじまります。25枚の絵にはそれぞれコメントが付記されていますので、本文は絵とテキストによる構成となるべきものでしょう。

作家が最初意図したのは、画面の上部7割ほどを絵に割り当て、その下に囲みで表題と、コメントが付記されるというものでした《参照》図-2》。

これでいいのか？ 絵とテキストを一緒に配置したいけれど、それでは絵も本文も縮小され、両者が効果的に表示されるとはおもえません。これをどうするかが問題でしょう。



絵、本文コメントを一緒に配置

(図-2)

4. 関連資料

『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』の作家は、ほかにいくつかの作品を書かれていることはすでに触れてきました。これら作品を読んでも、本人が鉄の防蝕^{ぼうしょく}という仕事に深く関わっていたからこそトタン屋根の風景にこだわってきたことが伝わってきます。なみなみならぬ作家の想いが作品を成り立たせていることに気付かされます。関連資料をどうしても備えておきたいとおもいます。作品の背景にある事実について、少しでも知っておくことの意義は十分あるでしょう。私たちはトタンとブリキの違いさえよく分からずに今日まで過ごしてきたのですから。『ブリキとトタンとブリキ屋さん』から、一説を転用して関連資料とさせていただきます。

5. 奥付

本には必ず最後尾に奥付という、著者、著作権者、発行者、発行年月日などを明記する部分があります。電子の本においてもこれを明示することは基本的な姿勢です。

Romancerの会員登録によって、奥付の画像出力サービスがご利用いただけます。詳細は以下から会員登録して、[出版サポート]の[表紙作成ツール]をご覧ください。

 <https://romancer.voyager.co.jp/>

さて、ここまで全体の本の構成を把握した上で、本文のなかにある絵と文章コメントの構成について、さらに深く見ていくことにしましょう。

先ほど《図-2》にあった、PDFの絵とテキストの関係は、単一ページのなかに両者が一緒に存在し、意味がハッキリしているということであったとおもいます。けれど一方で、画面の小さい電子端末では、絵もテキストも縮小して読みにくくなるのが問題でした。

もうすこし絵をゆったりと見せられないか。テキストは明瞭に読めるようにできないか。一度PDFの固定レイアウトを離れ、どんな電子端末でもいい感じで読めるようにリフロー型でトライしていくことにします。

単一ページに絵もテキストも入れてしまえば、スマートフォンのような小さな画面では全てが縮小して読みにくなります。読みやすくするにはどうしても複数のページに渡る構成としていかななくてはなりません。

では、絵を先にするのか、テキストを先にするのか、あるいはその逆がいいのか？ 特別な決まりはありません。なによりも作家の意思が尊重されるべきものでしょう。ここでは次のように表示の順序を決めました。

対象となる絵の表題。見出しとして表示され、目次項目にもなる。

《参照》図-3-1》

次に、対象となる絵をできるだけ大きく表示できるように。

《参照》図-3-2》

その次に、対象となる絵に付記されるコメントの文字表示。読みやすく。

《参照》図-3-3》

表題を単一のページに扱うことによって、表題、絵、本文がそれぞれの単一の3ページに分割したことになります。

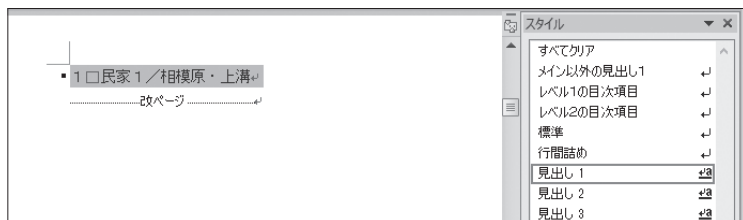


(図-3-1)

(図-3-2)

(図-3-3)

一例として対象となる絵の表題「民家1／相模原・上溝」に、Wordのスタイル「見出し1」を設定してみます。《参照》図-4》



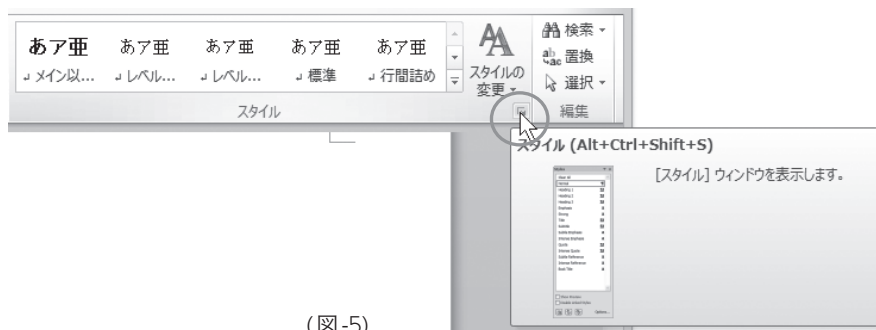
MS Wordのスタイルで「見出し1」を指定

(図-4)

【見出し1】の設定を行うだけでは、見出しはMS Wordのデフォルトの設定のままで、見出しの「スタイル」＝「見た目」が指定がされたわけではありません。「スタイル」とは、文字の、大きさ、書体、文字色、傾き、太さ、段落前後の空き、などの表示に関することです。ここで自分の意図に最適となる見出しの「スタイル」を変更してみます。

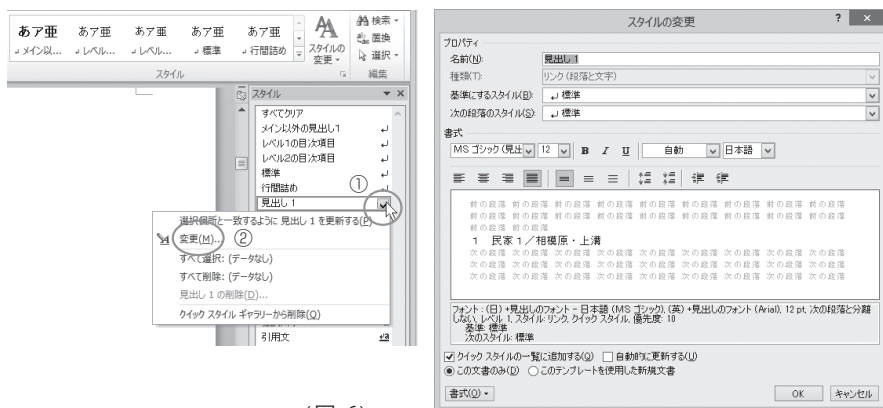
絵の表題「民家1／相模原・上溝」に、見出し1を設定し、その「スタイル」設定の手順を図を見ながら説明いたします。

まず[スタイル]ウィンドウを表示させます。[ホーム]タブで右側に[スタイル]というエリアがあります。そのエリアの右下のボタンをクリックすると[スタイル]ウィンドウを表示します。《参照》図-5》。



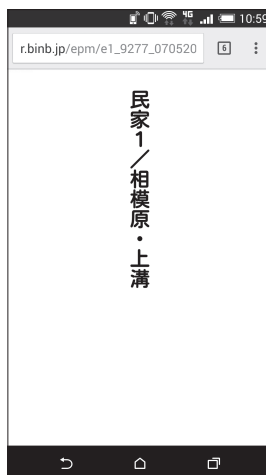
(図-5)

[スタイル]ウィンドウで「見出し1」の右側のボタンを押して、ポップアップメニューから[変更(M)…](Mac版の場合は[スタイルの変更…]以下同)を選択します。すると[スタイルの変更]ウィンドウが現れます。《参照》図-6》



(図-6)

文字サイズは、ここではサイズ18(少し大きめ)に設定してみました。対象となる絵の表題ですから、単独でページ中央に、大きめな文字で表題の「民家1/相模原・上溝」が表示されるようにしてみたかったのです。《参照》図-7》



扉としての表題

(図-7)

▶ 文章を少し加えてみたら

『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』は画集であり、もともと文章が多い構成ではありません。これをリフロー型に再構成しようというのです。リフロー型での見え方をPDF 版面と比較しながらみていくことにしましょう。

最初に「はじめに」の部分をみてください。「はじめに」のすべてのテキストをPDFで1ページに収めると、画面サイズの小さいスマートフォンなどでは凝縮した版面となって読みにくくなってしまいます。《[参照](#)》図-1 参照

リフロー型では、「はじめに」のテキストを何ページかに分けて、画面サイズに合わせて表示させていきます。ページ数は増えますが、1ページに表示される文字の情報はゆったりとした適正を保つことができます。

単に画集として絵を見るだけでなく、最初になぜトタン屋根の風景を描くことになったかを伝える「はじめに」の文章があり、アクリル淡彩のトタン屋根の風景が続き、作家の短いコメントが入り、関連情報「トタンについて知る」が入って、余韻を残して終わるという構成が出来上がりました。

どうでしょうか。トタンに関連する知識を得るために、同じ作家がすでに書いている専門書の一説を、読み物として備えてみたのです。

このようにリフロー型は文字表現に向いていますから、構成の中に少しテキストを加味していく工夫を考えてみていただきたいとおもいます。

▶ 絵をレイアウトしてみよう

画集ですから、できれば絵は大きく見せたいものです。

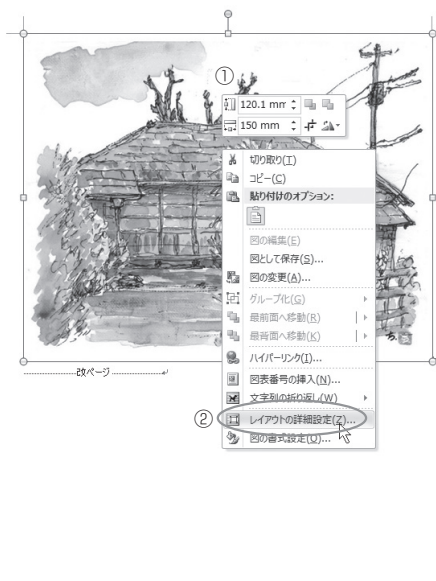
ページに一枚の絵を配置するようにすれば、画面に対して相対的に最大の表示ができます。画面を縦にしても横にしても、極端な変化が出ないように配慮する必要もあります。

一枚の絵だけをページに配置するために、画像データの前後に改ページ（ページ区切り）を入れると、ページに一枚の絵を配置できるようになります。

絵の表題の後で改ページを入れてから、画像データを挿入します。

画像データを挿入した後、画像データの上で右クリックして「レイアウトの詳細設定」を出します。そして「文字列の折り返し」で「行内」を選びます。

《参照》図-8》



画像の挿入と「レイアウトの詳細設定」

- ① 画像を挿入したら画像の上で右クリックしてポップアップメニューを表示し
- ② [レイアウトの詳細設定 (Z)...] を選択する
- ③ [レイアウト] ウィンドウが現れるので[文字列の折り返し]タブの[行内]を選択する



(図-8)

さて、絵の画像データサイズはどれくらいがいいのでしょうか？

Romancer では、縦長の画像の場合には、高さ1280ピクセル、横幅800～900ピクセルを推奨しています。今回の絵は正方形に近いやや横長の絵です、横幅を1024ピクセルにそろえてみました。

画像データの簡単な基礎的知識をここでは述べておきます。画像データの形式はJPEG(拡張子.jpg)またはPNG(拡張子.png)を想定してください。画像データにはいくつもその種類がありますが、使われる目的によって適用が違ってきます。電子の本での利用では、写真ならJPEG形式を、絵の場合はPNG形式を選びます。ここでの例は画集ですからPNG形式にしています。

▶ リフロー型の特徴

デジタルの本としてリフロー型『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』ができあがりました。全体をざっと見通してみましょう。

表紙から目次へ、本の印象を鮮明に与える大切な第一歩が表紙だとおもいます。Romancerでは、本の対外的なプロモーションとして紙の本に擬した画像を利用しています。あたかも“本”のような体裁です。この画像をアイコンとして“本”を触ると即ページが開かれる対応を推奨しています。

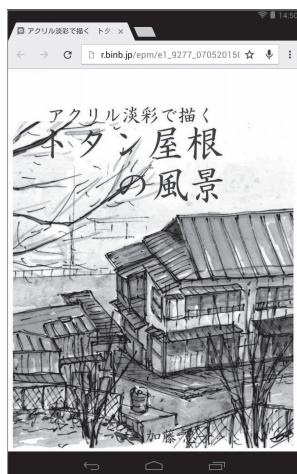
《参照》図-9》

本来の表紙となるデザインは必ず先頭ページに配置されます。

《参照》図-10》



(図-9)



(図-10)

目次ページは、25枚の絵の表題を表示、そして関連資料、著者略歴まで。すべて任意の項目へ一瞬にして飛ぶことができます。画面サイズの大きい環境では、目次を鳥瞰することができるでしょうし、モバイル端末では分割された何枚かのページで目次を見通すことになります。《参照》図-11》



(図-11)

文字中心の版面表示は、典型的にこのようなかたちとなります。本文のある章の先頭部分を、文字サイズを変えて表示しています。本文文字サイズは、電子本の特徴としてサイズ変更が可能です。《参照》図-12》



文字サイズ 小

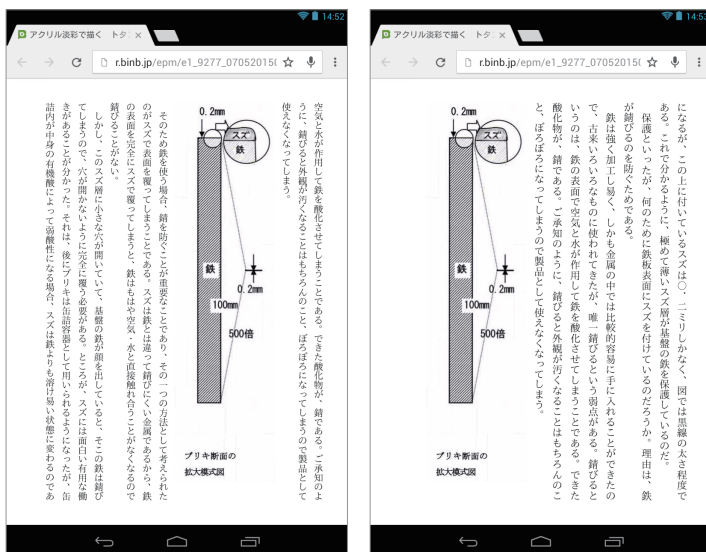
文字サイズ 標準

文字サイズ 大

(図-12)

本文中に画像を配した場合のモバイル端末での見え方を事例として示します。またその場合に、文字サイズを変更した表示についてもご参照ください。

《参照》図-13》



(図-13)

こうして『アクリル淡彩で描く トタン屋根の風景』はリフロー型が公開されました。Romancer 作品公開広場でどなたでもご覧になることができます。以下の URL にアクセスすれば、作品の詳細が表示され、ブックアイコンの[読む]を押すことでページが開き閲覧することができます。

《参照》図-14》



(図-14)

http://r.binb.jp/epm/e1_10743_09062015011658

チェックポイント

実際の作例をもとに原稿のつくり方のおおよそのポイントを紹介しました。この外にも実際につくられる際のチェックポイントとして把握しておくべき基礎的な事例を解説しておきましょう。

これらはRomancerに「制作ガイド」として詳細説明が準備されています。参照してください。「制作ガイド」をご利用いただくためにはRomancer会員登録が必要となります。ここでご説明する各URLにアクセスする際にはRomancerに会員登録し、ログインしてください。

▶ 画像に関して

- 画像は行と行の間に挿入しよう

ふつう私たちは版面のあり方を紙の本のレイアウトから学びます。それを真似したいとおもっています。けれど、最初に考えておかねばならないのは、デジタルの本は紙の本とは違うということです。紙の本は一定の版面のサイズに基づき、固定され、誰もがどこでも同じ版面を見ます。送り手の意図が常に維持されるのです。これに反してデジタルの本は、読者が閲覧する版面サイズがまちまちです。人によっては文字の大きさを変えたりします。表示版面はこちらが送り出すものではなく、受けとる読者がそれぞれの環境に基づいて設定され変化するものなのです。

ですから、以下のような点については細心の注意が必要です。

1. 特定の位置(右下、左上など)に画像を配置させたいという送り手の意図
2. 画像に対して、本文が画像を回りこむようにさせたいという送り手の意図
3. 画像のサイズを指定する大きさ一定に保っておきたいという送り手の意図

ここでもう一度思い出してください。画面のサイズは一定ではなく変化するのだということ。レイアウトが変わるデジタルの本では、画像を定まった位置に配置する考えがそもそも成立せず、流動的に対応しなければならないわけです。

画像を文章の途中に配置させるようなことは、できるだけ避けるほうが

安全です。画像は、原則として行と行の間に独立させて配置しましょう。

《**参照**》図-8 参照》

参考 画像の挿入方法

 <https://romancer.voyager.co.jp/imagehandle>

- Romancerでは、MS Wordでの作図はNG

MS Word 自体に、図を作成する機能があります。けれどMS Word で作成した図はRomancer では正しく変換できません。

図はあらかじめ JPEG または PNG の画像として貼りこむようにしてください。原則として、写真は JPEG 形式で、絵は PNG 形式です。

参考 原稿の作り方(MS Word編)

5.1. 表現自体がなくなってしまうもの

 <https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

- 図表・グラフは画像にして貼りこもう

図表は、変換されますが、各種の指定は無視されます。変換された EPUB 3 を読み取る各種 EPUB リーダーの対応に依存するからです。図表は、意図通りに表示されることは少ないと考えてください。図表は、画像にして貼りこむことを推奨します。

参考 原稿の作り方(MS Word編)

5.2. 見え方が異なってしまうもの

 <https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

▶ 見出しと段落に関して

- 見出しはスタイルで設定しよう

見出しについてももう少し詳しくお話しいたします。

Romancer は、スタイルで見出し(見出し1、見出し2、見出し3)を設定しておく、その見出しは自動的に目次に反映される機能が備わっています。見出し1は「章」とみなし、見出し2は「節」に、見出し3は「項」に、振り当てています。

見出しのスタイルの設定方法は以下をご覧ください。

参考 原稿の作り方(MS Word編)

3.2. 見出し

4.2. 見出しの設定

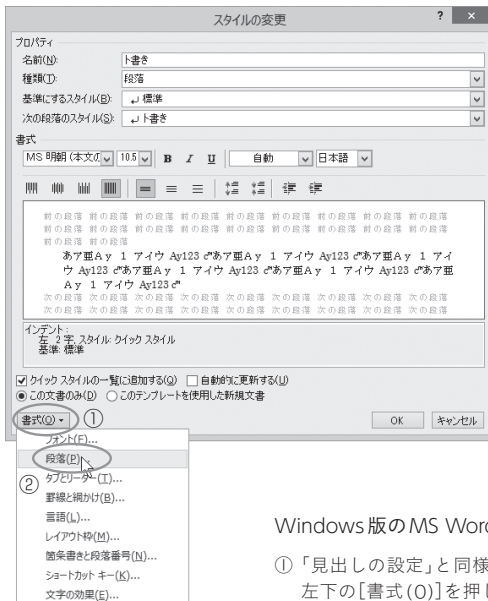


<https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

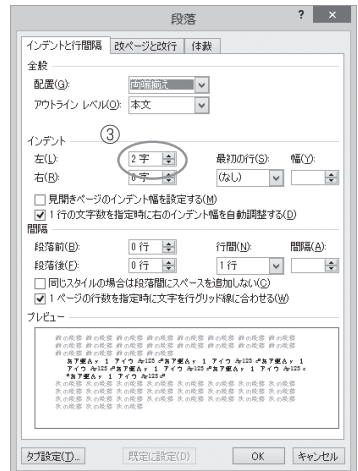
- 段落のインデントはスタイルで設定しよう

引用などを行う場合には、よく段落全体を字下げします。このことをインデントを付ける、と言います。台本の台詞のような場合に、2行目以降を一律に文字下げするレイアウトがあります。スタイル指定を使って、段落の設定を行いましょう。《参照》図-15》

見た目本位に改行を入れたり全角スペースで行頭をそろえたり、という方法をとりがちです。画面サイズや文字サイズが変われば、レイアウトが崩れてしまいます。



(図-15)



Windows 版のMS Word(2010)での段落スタイルの設定方法

- ① 「見出しの設定」と同様に[スタイルの変更]ウィンドウを表示した後、左下の[書式(O)]を押して押してポップアップメニューを表示し
- ② [段落]を選択する
- ③ [段落]ウィンドウが現れたら、インデント「左:」の数字を変更する

参考 原稿の作り方(MS Word編)

4.3. 段落の設定



<https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

文字について

- 書体(フォント)指定はシステム標準のフォントを使おう

MS Wordを使うと、ご利用のパソコンにインストールされている全てのフォントを指定することができます。しかし使用したフォントがそのまま使用できるPDFとは異なり、EPUBリーダーで使用できるフォントは、通常は明朝系、ゴシック系それぞれ1種類です。複数のフォントを指定して見た目を変えても、Romancerでは、明朝、ゴシックいずれかに変換します。基本的にはMS 明朝、MS ゴシックなど、システム標準のフォントを使うようにしてください。

参考 原稿の作り方(MS Word編)

3.4. フォント指定

 <https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

- 読みにくい漢字にはルビ(ふりがな)をつけてみよう

MS Wordのルビ機能を使うと、本文に、読みにくい漢字などにふりがなをつけることができます。

参考 原稿の作り方(MS Word編)

4.5.1. ルビ

 <https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

- 数字の書き方は統一しよう

数字は、算用数字と漢数字があります。さらに算用数字には全角と半角があるのです。

縦書きの場合は、原則として、漢数字にそろえてください。

算用数字を使う場合には、全角・半角を意識するようにここがけてください。版面での不揃いを避けるためです。

Romancer には「数字の自動処理」という機能があります。この機能を使うと、全角・半角の数字をそろえるようにしています。2桁の数字は半角にして横に並べ(これを「縦中横」と言います)、それ以外の数字は全角にして直立させます。この機能は数字だけに働きます。

- 過度の文字装飾はNG

使用できる文字の装飾は、下線、太字、文字色、斜体、取り消し線です。

二重取り消し線、下線の色、囲み文字、網掛け文字、隠し文字、文字背景色、拡張書式を使った装飾(縦中横を除く)、袋文字、光彩は変換できません。

参考 原稿の作り方(MS Word編)

5.2. 見え方が異なってしまうもの

 <https://romancer.voyager.co.jp/how2makebyMSword>

▶ その他

- 変更履歴は削除したか？

MS Wordの「変更履歴の記録」は便利な機能です。ですが、変更履歴が残ったままRomancer で変換すると、変更履歴の箇所は欠落してしまいます。原稿が完成するまでは、変更履歴の記録は重要ですから、編集用のファイルは残したうえで、Romancerで変換するための原稿として複製を取り、その複製の原稿で、変換する前に、「承諾」>「ドキュメント内のすべての変更を反映」を行って変更履歴が残っていないようにして下さい。



(図-16)

あなたの出版を支援する

ボイジャーは一貫して小さな出版を推進する道を歩いてきました。常に電子的な出版のための方法やサービスをみなさまへ提供してきました。しかし、すべてが満足いただけるものでなかったことも事実です。技術の進歩と市場の変化によって、せっかくの作品を読むこともできなくなってしまったという最悪の事態に陥ったこともあります。

作品として残るということを一番大きな課題として掲げました。伝えたい意思を残すものが作品だからです。残すことができない出版を人は認めないだろうとおもいます。自分たちが作品を失ってはじめてそのことを知ったのです。デジタルであろうと何であろうと出版する責任についての自覚でした。

シンプルにつくることを念頭におきました。過度に最先端の技術に依存することが短命であることを身にしみて思い知らされたからです。作品本体はできるだけスリムに本文と写真・画像に抑制し、映像や音声は外部リンクに徹底するようになりました。インタラクティブな対応のための特殊なアプリケーション開発はできるだけ避けました。

すべては世界の標準・共通となる技術基準に従ったのです。この姿勢は作品から不必要な虚飾を剥ぎとり、コミュニケーションに必要不可欠なものとして、テキスト、画像、映像、音声、という情報要素を禁欲的に対処する姿勢を育みました。

ボイジャーが体得したものは経験です。技術スキルやデザインスキルではなく、デジタル出版で起こった幾多の失敗とかすかな成功の経験です。そこから読者のために、作家のために、何をどうするべきかを示唆できる立場が生まれたのです。

▶ Romancer は作品の出版・公開ツール

ご自身の意思を作品としてデジタルに残す方法をボイジャーは提供いたします。その出版ツールがRomancerです。2014年夏にテスト導入され、1年の試用期間を経て本格的な導入となりました。

以下のRomancerページより、今すぐ会員登録して、制作用のダッシュボードから制作を開始することができます。

制作された作品は広く世界に向けて公開できます。できあがった作品に振られた独自URLを伝えることで、それを知った誰でもワン・クリックで瞬時にその作品のページが開かれるのです。世界のどこにしようと、iPhone/iPad、Android……どんな端末であろうと、インターネットのもとに本は開きます。

作品の根本となるデジタル・データは、世界の標準・共通基準となるEPUBでつくられます。もっとも信頼を置くことができる、消えにくい“情報の原液”といっていいでしょう。

▶ 作品の制作協力をします！

Romancerは無料でご利用いただけます。誰もがいつでも利用できる自由をもつことはとても大事です。一方で、ある利便を使いこなすには慣れない手順を体得する学習が必要です。若い柔軟な世代ならともかく、年配者には何もかもが新奇なデジタル世界の言葉や概念を受け入れるのは限界もあるでしょう。やりたい気持ちと諦めの綱引きに少なからず悩んでしまいます。

制作協力サービスがあなたを支援します。ボイジャーのデジタル出版での長い経験と実績をみなさまの作品制作に役立てていただきたいとおもいます。

このサービスは有料です。詳細は、Romancer ページから、[詳しくはこちら]を押し、[有料支援サービス]から情報をご覧ください。

表現から技術、販売まで、それぞれの専門スタッフが皆さまの作品づくりを支援いたします。ボイジャーの9人の専門スタッフが担当します。

何を訴えたいのか、何を残しておきたいのか、あなたの意思をデジタルで具現化し、これを世界の一人でも多くの人に届けるために、ボイジャーはこの世界で培ったあらゆる経験と知識をあなたへ提供いたします。

専門スタッフの詳細は以下よりご覧ください。

▶ 作品の販売協力をします！

デジタルの本は、ホームページやブログとどこが違うのでしょうか？
本は、なにかに付随した読み物というのではなく、作品として独立性があり
単体として独自性をもっています。デジタルの本であろうと、紙の本であ
ろうとこれは同じです。独立とか、独自とか、単体とかをもとに、本を販売・
流通させることが可能になってきます。できあがった作品を人に渡して読
んでもらったり、販売のために書店を通して流通することが可能です。

Romancerを使って制作した作品(EPUB 3形式)を入稿すれば、だれでも
自分の作品を販売することができます。個人でも販売できる書店はいくつ
もあります。

問題なのは、こうした書店での販売には複雑な手順を必要とします。書
店との販売に関する条件など契約が必要となります。ネット上でこれを処
理できるようなシステムになっていますが簡単なものではありません。出
版のためのデータを書店に渡すやり方も書店ごとにまちまちです。
Romancerには、こうした面倒な手順を作家から解放し多くの有力な電子
書店で販売していく「販売委託サービス」が準備されています。

このサービスは有料です。詳細は、Romancer ページ《[参照](#) 図-16》から、
[詳しくはこちら]を押し、[有料支援サービス]から情報をご覧ください。

販売可能となる書店の一覧表を以下よりご覧ください。また書店一覧と
ともに、お客さまの作品の販売価格に対する受取売上額の想定を明示して
おりますので合わせてご参考になしてください。

 <https://romancer.voyager.co.jp/trustsale>



出 版 を 考 え 直 す
画 面 サ イ ズ と 電 子 本
絵 と 文 章 の 構 成 を 考 え る
見 出 し の ス タ イ ル の 設 定
絵 を レ イ ア ウ ト し て み よ う
リ フ ロ ー 型 の 特 徴
チ ェ ッ ク ポ イ ン ト
あ な た の 出 版 を 支 援 す る



株式会社ボイジャー <http://www.voyager.co.jp/>

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-41-14 Tel 03-5467-7070

Fax 03-5467-7080 E-mail rmsupport@voyager.co.jp

© 2015 Voyager Japan, Inc.
Published in Japan
Not for Sale.

発行年月日：2015.7.1